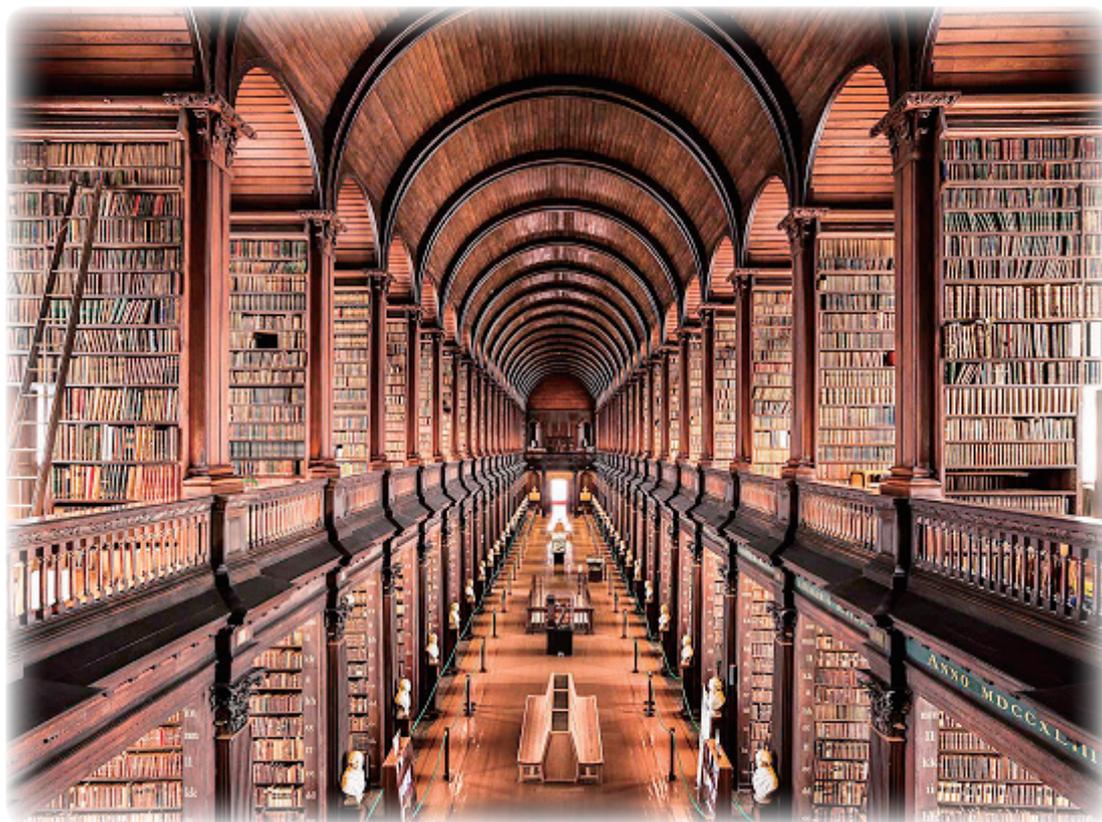


図書館報

第133号
平成30年2月15日
大分工業高等専門学校
図書館
大分市牧1666番地
TEL 097(552)6084
FAX 097(552)6786



アイルランド最古の図書館といわれるトリニティ・カレッジ図書館

〈もくじ〉

題字「図書館報」	（校長 古川 明德 書）	1
扉写真:アイルランドのトリニティ・カレッジ図書館	写 真 家 Thibaud Poirier	1
漢字の素晴らしさ	校 長 古川 明德	2
おおいた文学散歩 (11)	一般科文系 山田 繁伸	3
思い出の一冊	一般科文系 朝美 淑子	4
	情報工学科 西村 俊二	5
	一般科文系 相本 正吾	6
第 103 回全国図書館大会に参加して	図 書 係 長 若林 薫	7
平成 29 年度 学生図書委員名簿		8
平成 29 年度 読書感想文コンクール入選者及び貸出上位者・貸出上位クラス		8
編集後記	図書館長補佐 東木 雅彦	8

漢字の素晴らしさ

校長 古川 明德



私が平成24年4月に校長として本校に着任した早々の始業式において、学生諸君には「元気、やる気、勇気」とメッセージを送りました。それは皆さんにとって、本人の健康も大切ですが「笑顔での挨拶」が周りの人に「元気」を与えること、そして高専に入学して大学受験からの束縛もない5年間（専攻科まで進学したら7年間）の高専生活を満喫するには、何かをやってやろうという「やる気」と「根気」を持つこと、それに若さをもつ特権で「失敗が許される世界」に居る諸君ゆえに何事にも挑戦する「勇気」を示すことこそが、大きな成長をもたらすものと信じるからであります。今年度で6年目を迎え、退任のとき30年3月が間近となりました。図書館報には、これまで、少しでも学生諸君が「図書館を活用してくれること（読書のすゝめ）」、「専門を離れた知識として知っておいて戴きたいこと（大分の歴史的人物、座右の銘、心豊かにする知恵）」そして「読書を通しての文章力の向上（日本語コミュニケーション）」を期待して巻頭言を書かせて頂きました。綺麗な言葉としての日本語を身に付けるにはお願いしたいこと、書きたいことが一杯あります。しかし時は来ました。今日は、日頃使っている「漢字」について思うところを書かせて頂きます。

毎年12月12日の「漢字の日」に、今年に相応しい漢字として最多応募数から発表される「今年の漢字」があります。それに倣い、第9代校長としての6年間を表す漢字を考えてみたいと思います。ちなみにこの間の「今年の漢字」は、金（H24、ロンドン五輪開催で金7個を含む38個のメダルラッシュ、金環日食、自立式電波塔東京スカイツリーの金字塔的完成）、輪（H25、2020年の東京五輪開催決定、TV番組での友達の輪、災害支援の輪）、税（H26、17年振りに消費税が8%にアップ）、安（H27、安倍政権、安保法案、安村君）、金（H28、リオ五輪開催で金12個を含む41個のメダル獲得、マイナス金利）、北（H29、北朝鮮、九州北部豪雨）でありました。それぞれの漢字からその年が思い起こされます。

では私の校長職6年間は？「今年の漢字」に倣って表しますと、「気（H24）」⇒「祝（H25）」⇒「守（H26）」⇒「逞（H27）」⇒「支（H28）」⇒「感（H29）」であります。まず「気」は、私が校長着任時の始業式に学生諸君に申し上げた言葉「元気、やる気、勇気」です。これに関する私の願いは本書の冒頭に書いたとおりであります。そして「祝」は本校創立50周年の式典を挙行し、今日の本校を築いてこられた方々に感謝申し上げ、

高専の未来を夢見て決意を新たに致しました。私が描く大分高専の未来は、明野通信116号や創立50周年記念誌に描いておりますので、関心がおありの方はご一読ください。十数年が経過して実現していることを切望致します。つぎの「守」は私にとってつらくて悔しい日々の反省として掲げました。その意味は「本校に学ぶ学生諸君を、どんなことがあろうともしっかり守り抜く」という決意を表したものであります。決して「攻守」の守勢を意図したものではありません（攻めこそ最大の防御という言葉もあります）。学生諸君そして教職員の皆様にとって、楽しく魅力ある大分高専になるよう努めてきました。さらに「逞」は明野通信119号に書きました通り、学生諸君には、皆さんの前に立ちほだかる障害をしっかり乗り越えていくだけの強い精神力を身に付けてほしいと望むものであります。それは学生諸君だけではなく教職員そして大分高専が日頃からの備えておくべき力だと考えます。「支」は、物をどんなに押しでも支えるものが無ければ「暖簾に腕押し」となって作用しません。また私共、一人一人は弱くても、学生と教職員が丸丸となって支えあえば、喜びに変えることができます。これが、その年の高専ロボコン九州沖縄地区大会初優勝そして全国大会の準優勝に繋がったと思います。最後の「感」は、多感な学生諸君の成長を五感で捉え、大分高専で過ごすことで多くの感動を得よう、そして外からの変化も常に感知して、それに即応できる高専であろうというものです。それに加えて、常に感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。皆さんも毎年1年を振り返ってご自分の1年を漢字に表してはいかがでしょう。さらには節目節目に、例えばこの高専での5年間または7年間を振り返って私の学生生活を漢字一文字に表せば？と、日記帳のどこか書き残していけば思い出として残るのではないのでしょうか。高専生活は「楽（しい）」、「厳（しい）」、「鍛（えられる）」、「躍（進）」とか挙げられるのでは・・・。

このように日本の漢字にはそれぞれ意味があります。それゆえに、皆さんの漢字の名前には、誕生時に込められた願いがあります。私の名前「明德」は、父が中国の四書五経の一つ「大学」から引いてきた言葉と聞いております。意味をネットで調べますと「天から受けた曇りのない天性（生まれつきの才能）」だそうです。その通りに育ったかどうかは別として、外国で自己紹介するときに、このようなことを話しますと大変羨ましがられ、漢字の名前に「誇り」を感じたことを記憶しています。そして外国の方から「俺の名前に漢字を当ててくれ」と頼まれたことが幾度とあります。皆さんもご自分の名前の意味するところを外国の方に説明することができますか。卒業式では、皆さんの名前を読み上げるとき、その名前に込められた期待や思いを考えながら、一人一人に証書をお渡ししています。

漢字はワープロの普及とともに忘れられ、また漢和辞典を引く機会も少なくなってしまうかもしれませんが、日本文化の一つとしていつまでも大切にしていきたいと思います。本校の図書館は漢字の宝庫です。大いに活用してください。

おおいた文学散歩 (11)

澤西祐典『別府フロマラソン』を歩く

一般科文系(国語科) 山田 繁伸

この小説は、2017年8月に出版された新しい作品である。あとがきによると、130枚を10日ほどで一気に書き上げたと言う。しかし、文芸雑誌「すばる」の依頼は30枚だったので、130枚の雑誌掲載は見送られてしまったらしい。それが1年ほど経って出版の運びとなった。本作品のメインイベントである「別府フロマラソン」、これは実在していない。実際に別府で行われているイベントは、「べっぷ^{びんぼう}フロマラソン」である。第一回が2016年の春行われて、第二回が2017年4月に行われた新しい別府のイベントである。作者は、それにヒントを得てこの小説を書いた。「別府」と「べっぷ」、漢字と平仮名とでは、同じ「フロマラソン」でも大きな隔りがある。

実在の「べっぷ^{びんぼう}フロマラソン」は、別府八湯温泉まつり期間中の3日間、企画に参加する温泉施設の中から、42.195湯(42湯+手湯)を選び完湯するスタンプリである。タイムレースでもなく、順位もなし、移動手段も自由で、42湯の完湯を目指すイベントである。42.195キロを走るフルマラソンにあやかっただけである。しかし、このイベントは完湯者が続出する和やかなものである。

一方の作者の創作した「別府フロマラソン」は、八つの温泉郷、つまり「別府八湯」それぞれから無作為に1湯が選ばれているのだが、その選ばれた8湯を探して入湯するイベントである。8湯は事前に知らされていないので、探し当てるまで次々と温泉に入らなければならない。正確には、その8湯とさらに特別指定の2湯、合計10湯を1日で回るイベントである。当たり湯であったら、指に^{びんぼう}マークがはっきり出ることになっている。両手の指に10個の^{びんぼう}マークを集めた者が完湯者ということで、願い事が一つ叶えられる。温泉郷も海に近いところがあるかと思えば、山際にもある。また、南の浜脇温泉から北の亀川温泉までである。移動は、公共交通機関は禁止されている。自らの足で行くか、はたまた特別な手段を使うしかない。過酷なイベントとなっている。

本の帯に「別府八湯を圧倒的なスケールで描き、市内の温泉施設や名所が多数登場。読み終わると、温泉に入らずにはいられなくなり、別府に行きたくなる！注釈を読むだけで別府温泉のことがぜ〜んぶわかるよ！」とある。確かに注釈も気が利いている。例えば、私が住んでいる近くの「とんぼの湯」については、次のように注釈している。



とんぼの湯

別府市の亀川エリア、スパランド豊海という別府湾を一望できる比較的新しい閑静な住宅街にある温泉施設。学生いわく「炭酸水素塩泉で肌によいとか。飾られた多くの絵画や「いろは」が描かれたロッカーは趣がある。

注釈の作成には、NPO法人別府八湯温泉道名人会と別府大学の学生が協力している。「学生いわく」の注は学生の感想である。これが意外に面白い。

作者澤西祐典は、第35回すばる文学賞を『フラミンゴの村』で受賞した30代の作家である。しかし、本職？は、別府大学の講師である。「本職？は」などと書いたが、京都大学の博士(人間・環境学)を持つ日本近現代文学の歴然とした研究者である。芥川龍之介などの研究論文を多数発表している。

そういう作者が、別府を舞台にしたユーモアあふれる痛快小説を書いた。主人公は、明礬湯太郎と、海野十三である。どちらも大学生、しかも湯太郎は、3年生であるが、十三は温泉道を究めるため留年を繰り返している。二人とも部員2人の温泉研究会の部員。二人が、今年も、「別府フロマラソン」にすべてを賭けて挑戦する話である。途中、市内の多くの温泉が登場する。

鉄輪温泉は、別府でもっともそれらしい温泉街である。街のいたるところから、湯けむりが天高く吹き上げており、その旅館と湯けむりの風景は旅情をかきたて、二十一世紀に残したい日本の風景百選では、堂々の第二位に選ばれている。一位はもちろん、富士山だ。



鉄輪温泉の湯煙

主人公たちが温泉を巡ってゆくのは、本のだこを開いても温泉が出てくる。温泉だけではなく、歴史的なことも出てくる。油屋熊八のことは勿論、別府大仏、ひょうたん閣、進駐軍などの話も出てくる。公共交通機関の使えない主人公たちは、進駐軍の掘った地下道で移動する。やよい商店街の天狗が団扇で扇いで主人公を飛ばしたり、竜巻地獄から竜の背中に乗って、明礬温泉に飛んだり、荒唐無稽の話が笑える。

着任間もないのに、作者は別府八湯温泉道名人(88カ所を1巡した者)となっている。温泉愛が作品のいたるところに溢れている。温泉に住む人々への作者の親しみでもある。大分高専にも、温泉道名人の一つ上である永世名人(88カ所を11巡した者)になっている人もいと聞いている。

思い出の1冊

『海猫』 一色や香りを感じる小説

一般科文系 朝美 淑子



谷村志穂という小説家が好きだ。彼女の小説の多くが映画化され、ドラマ化もされている。私は映画化されたものも好きであるが、どんな作品も文章で読むことを好んでいる。理由は、タイトルにも書いた通り、色や香りまで、小説から感じるからだ。私は読書を頭のなかのビジョン

で写しながら読んでいくタイプだ。そこは、ビジョンでありながら、同時に自分もその場にいるような気分になる、小さな脳内トリップ体験だ。それが私が読書を愛して止まない原因なのかもしれない。小説の中には、ミステリーや歴史もの、啓発本など、割と無機質に真実や内容を、淡々と描くものも多い。それはそれで、やはり読むのは好きなのだが、たまに、現実を忘れるくらい、どっぷり小説の中にワープする体験が好きだ。谷村志穂の作品は、必ず、色や香りを感じるような気分になる。時には、小説内の温度を感じることや、出てくる洋服や布の生地の質感すら感じることがある。「海猫」は函館が舞台なのだが、冒頭部分にこんな情景がある。『運転手にとって、白無垢を着た花嫁を乗せた貸し切りバスを運転するのは初めてのことだった。ハンドルを握る手にかすかに汗が浮かんた。函館の男らしく、祝い事のために景気良く下ろしたてのワイシャツを着ている。その上から、制服である紺色のジャケットを着ていたが、シャツの真新しい襟元が気になって、仕方がない。それでつい首に手を当て、ついでにルームミラーで座席を除きこんだ。(中略) 一体、なんて白い花嫁なんだべ、と思う。顔も首も白く塗られているのはもちろんなのだが、塗られているというのが感じられないほど、その色は澄んで見えた。鼻先は小さく尖り、かすかに上を向き、赤く彩られた豊かな口元は少し開かれたままだ。青色がかった目は窓の外を向いたままで、表情だけからは喜びを見いだすのは難しかった。』

この文章の冒頭で読んでいくと、函館の肌寒さと、バスの中の運転手と、花嫁のバスの中に、あたかも自分が立って見ているような気持になる。傍観者としてそこに立っているような気持になる。谷村志穂の作品には、『余命』『移植医たち』など、有名な長編作品もあるが、短編小説も数多くある。そして、どれも私をトリップさせる不思議な力がある。私は森鷗外の作品の愛読者でもあるが、二人に共通しているのは、美しい日本語が使われていることだ。文章が整然と並んでいる作品は、時代が変わっても、人を魅了する。(最近知ったのだが、谷村志穂の大学時代は森鷗外の息子が教官だったらしい。文体や作風に与える影響はわからないが、不思議な共通点だった。)

私のトリップ体験はさておき、谷村志穂の作品は必ず女性が主人公である。不運に生まれた女性が真実の愛に翻弄されていく作品が多いのだが、その作風には時代を超えた普遍の女性ならではの苦悩が描かれている。それは、女性にしかわからないものではなく、おそらく男性にも理解できるものなのではないかと思う。懸命に生きていながら、どれが真実の愛なのかに気づくのが遅れてしまうことから悲劇が生まれる。そして、その苦しみの中に美しさを見つけて、必死にすがり生きていく。その血は脈々と主人公の娘たちに受け継がれていく。彼女を愛してしまった男性たちは、彼女の心の内が読めず、苦悩し、さらに彼女を苦しめてしまう。彼ら自身もまた、その真実の愛の中で苦しむことになるのだが、私の拙い文章能力では、その深さが伝わらない。

『海猫』はひたむきな人間の生き方を描いた作品である。また宗教面においても、登場人物を語る上でエッセンスになる。どの人間も悪くない。みんなそれぞれ一生懸命に生きた結果なのだというを痛いほど感じさせてくれる作品である。余談ではあるが、映画化されたものも見たのだが、とても美しい作品ではあったが、やはり文章に勝ることは難しい。もちろん時間や映画の都合で省かざるを得ないことはわかっているのだが、映画化するということが、非常に難しい作品なのである。よく漫画の実写化を賛否する声は聞くが、小説の実写化についてはあまり議論が起らない気がする。これからは、小説の実写化もニュースになるくらい、みんなが読書好きになるとよいと思う。

日常生活に疲れ、いろんな事が嫌になったときに、ぜひこの本を読んでみてほしい。上下巻あつて読み応えはあるのかもしれないが、眠るのを忘れてしまうくらい引き込まれていくのではないかと思う。私のようにマニアックにトリップしなくて良い。一生懸命生きることに意義があること、その結果が、どうなってもそれは仕方がないことだし、それはそれで良いのだ、と思えるからだ。『余命』も女性が主人公であるが、人生いつどうなるかわからない。でも一生懸命に生きることに意義があり、それが人間の美しさであり、強さであると強く感じさせてくれる。強く、しなやかに生きたいと自分を原点に戻してくれる作品でもある。

読書離れが進んでいると世間では言われているが、高専の学生は読書をしている姿を他校と比べて多く見られる。それはとても嬉しいことであるし、皆さんにはとても素敵な図書館がある。初めて本校の図書館に足を踏み入れた時、工業系の本以外にも百科事典や、地元大分に根差した資料が多くあることに驚いた。古地図集などはこれからみていきたいジャンルである。もっと図書館に行って、自分のジャンル以外にも目を向けてほしい。そんな一冊として、今回の作品を紹介できたらと思う。

思い出の1冊

暗いところで待ち合わせ

情報工学科 西村 俊二



周りとうまくなじめない…、人が話をして笑っていると、なんだか自分のことを笑われているような気がする…。そんな思春期あるいは中二病真っただ中のあなたにおすすめしたい一冊です。

著者の乙一（おついち）さんは久留米高専の出身で、在学中から小説を書いていたそうです。そう言われると文体からもどことなく理系の雰囲気を感じる気がしてきます。乙一さんは高専の5年間を「人生で一番鬱屈した時代だった」と語っているようですが、一般的にも高専生の年代である16才～20才といったら人生で最も多感な5年間と言えるのではないのでしょうか。私も高専の出身ですが、そういえば高専生の頃は毎日毎日悩んでばかりだったと思います。何について悩んでいたかと言われると、今となっては漠然としか憶えていませんが、なかなか背が伸びないなーなんてことからいかに生きるか的なことまで、さまざまだったと思います。

乙一さんの代表作としては、今回紹介する「暗いところで待ち合わせ」の他にも多々ありますが、短編集も秀逸で「ZOO」や「失はれる物語」があります。短編では叙情を味わうというより、思わぬ展開・どんでん返して衝撃を与えて楽しませてくれる、いわゆるショート・ショートが多くなっています。ネタばれしない程度にそれぞれ一つずつ紹介してみます。

「ZOO」に収録されている「陽だまりの詩」は、年老いた主人公と、主人公の最期を看取るために作られたロボットの話です。主人公はプラスチックのおもちゃのブロックで船を組み立てることができ、ロボットには創作活動はできません。設計図のあるものやあらかじめ手順が決まっているものしか作ることができないのです。ロボットは「彼のように私もブロックで遊べたらいいのに」と思います。でもよく考えてみてください、人間だって赤ちゃんの時は何もできなかったのに、成長するにつれ色々できるようになってきたのです…。

もう一つの方の表題にもなっている「失はれる物語」は、交通事故により五感の全てを奪われ、残ったのは唯一右腕の皮膚感覚のみとなってしまった男性の話です。男性はそのような不自由な状態のままずっと入院しています。男性の妻はピアニストであり、感覚のある右腕を鍵盤に見立てピアノを弾くことで夫に思いを伝える日々を過ごします。男性は体を動かすことはおろか声も出せず、自分の意志でできることは指先をわずかに動かすことだけですが、それでも自己の尊厳を保つためにある重大な決断を下します…。私はこの究極の状況における心情描写に心揺さぶられ、最後の決

断に戦慄を覚えました。ちなみに乙一さんの奥さんは「ゴースト・イン・ザ・シェル（攻殻機動隊）」のアニメなどを監督した押井守さんの娘さんだそうです。

さて本題の「暗いところで待ち合わせ」ですが、この物語は視力をなくしたミチルの家に、警察に追われたアキヒロが逃げ込んでくるところから始まります。

ミチルは幼い頃は見えていた目が見えなくなってしまったこと、また、家族をなくしてしまったこともあって、気持ちが塞ぎがちで、家に引きこもっています。学校でいじめられていたことを思い出しては「外は傷つくことでいっぱいかもしれない。しかし、何も見なくてすむようになった今、家から出ずに保険金だけで暮らしていけば、もう心を乱すことはない。」と心を閉ざしています。外界との接点を最小限にして、できるだけ家から出ないようにして一人で生活しているのです。ミチルほど極端でないにしても、私も嫌なことがあったら引きこもりたくなるタイプですので、気持ちは分かります。

アキヒロの方は印刷会社に勤めていますが職場の同僚達となじめません。「一人でいることをいつも望んでいた。そのためにいつのまにか自然と孤立する。その傾向は中学のときから続いていた。」周りと合わない、自己主張ができない、という悩みは誰にでも起こり得ます。世間ではストレスの原因の第一位は人間関係と言われますから、アキヒロのことも人ごととは言えないのではないのでしょうか。私もいい大人のくせに世間話のようなものが未だに苦手で、床屋さんで話しかけられないように寝たフリをするタイプです。ストーリーに戻りますが、アキヒロは何らかのトラブルを起こして警察に追われる身となっています。

ミチルの目が見えないのをいいことに、アキヒロはミチルの家に入り込み、息をこらして隠れます。他人どうしの奇妙な共同生活の始まりです。ただしアキヒロがいくら気を付けても、ミチルにとっては長年住み慣れた我が家ですから、最初はちょっとした違和感から、そして徐々にアキヒロの存在に気付き始めます。そして恐る恐るその危険性を測ろうとします。そう、徐々に気付き、そして恐る恐る測るんです。なぜなら、ミチルが気付いたことをアキヒロに知られたらこれまでのように共存はできず、暴力を振るわれるかもしれないからです。さてこの共同生活はどうなっていくのでしょうか。

寒さの厳しい冬、身も心も冷えきってしまい、もうダメだもうイヤだってなったとしても、ひとまず食卓に座って温かいシチューを食べるとあら不思議凍えた心と体がほっこり溶かされてゆく、そんなお話になっています。こう言うとタイトルとのギャップがすごいですが、是非読んでみてください。

暗いところで待ち合わせ、乙一著、幻冬舎

思い出の1冊

『貧しき人びと』ほか ドストエフスキー著

一般科文系 相本 正吾

私が中学一年の終わり頃、学校の図書館で、何か読もうと思って館内の本棚から適当に引き出して手に取った本が、ドストエフスキーの中編小説『貧しき人びと』だったのでした。本の初めを開いた瞬間、その本の扉のところに、ペローフ作で知られるドストエフスキーのモノクロの肖像が不意に私の目に入ってきました。その時、私はその風貌に思わずひきつけられて、しばし突っ立ったままその風貌に見入っていたことを今も記憶しています。これが自分のドストエフスキーとの最初の対面でした。その時妙な興奮にとらえられた自分は、ともかくも、その日は、その本を借りて帰り、家ではドストエフスキー！ドストエフスキー！と口に出してその長い名前を覚えようとしながら『貧しき人びと』を読み始めました。『貧しき人びと』を読み終えてのち、引き続いて、自分のドストエフスキー文学の読書が、『罪と罰』そして『カラマーゾフの兄弟』へと移ってからは、日々未知の世界に連れて行かれるような、私のドストエフスキー文学への入れ込みが始まりました。私は、その時まで、算数が得意・大好きで将来数学者になりたいと思っていたのですが、『罪と罰』との出会いにより自我及び文学の面白さや価値・可能性に強烈に目覚めてしまい、私は、文学少年・文系学生へと変貌してしまったのでした。その後、大学も文学科を選ぶことになり、中学一年の時のドストエフスキーとの出会いとその後のドストエフスキーの文学や思想との長年の付き合いは、私のその後の人生の方向や物の見方や精神に大きな影響を与えていったのでした。

ドストエフスキーの小説には、対話のシーン、話者が出来事や回想を語るシーンが多くて、短期間の間に展開される室内での会話劇・内面劇・思想劇・活劇といった特徴があり、世間の歴史小説に見られるような大河的なストーリー展開や登場人物の外的行動の展開が欠けているという批判もありますが、『罪と罰』『白痴』などは、登場人物や事件が次から次へと現れてきて、各場面はスリルや緊迫感に満ち、読者は、しばしば、「巻を置くあたわず」「憑かれたように読みふける」といった熱中状態に陥ってしまいます。ドストエフスキーの各小説には、途中、山場となる劇的な場面が必ずいくつかあって、ドストエフスキーの手腕によってのちを吹き込まれた名場面のボルテージ・精神性の高さというのは、読者に忘れがたい印象を残します。読者を引きつけていくこれらの傾向は、大衆紙への連載ものとして、ドストエフスキーが読者へのサービス

を常に意識していて、読者をひきつけようと各場面でその様々な職人芸を發揮していることはもとより、『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』などに見られる、下手人捜し、種々の謎をあとあとまで残したままの展開、謎めいた人物の登場、といった推理小説ふうの、次に何が起こるのか予想しがたい傾向にもよっています。

ドストエフスキーの小説には、世間から悪評を受け自らもそのように振る舞っている登場人物が、時に、秘めた思い・考えの清らかさ・高さを示す珠玉の言葉を吐露するシーンがあり、読者はハッと心打たれることがあります。これなども、ドストエフスキーの小説の大きな魅力です。これは、各登場人物に対して、また、善性を必ず内に秘めている人間というものに対して、ドストエフスキーがこまやかな同情や愛情や信頼を向けているからでしょう。主人公の大半が青年であるという点も、若い読者を引きつける点になっていますが、勝ち気な婦人や娘、子供たち、しがたない初老の男を描くのも実にうまいのは、周知の通りです。また、ドストエフスキーの各小説に脇役として登場してくる道化役たちが周囲に振りまく滑稽さ・ユーモアというのも味わいがあり、ドストエフスキーの小説では、脇役までが実にうまく描かれていると言えます。

小説というものは、息抜きとして、気軽に読めるという面も要求されると思いますが、私としては、ドストエフスキーの作品が孕んでいる思想性や宗教性も大きな魅力なのです。ドストエフスキーの小説ほど、人間や人生やこの世界に関するいろんな根本的な諸問題を、真正面から、あるいは、択一という形で、読者に突きつけ、人間や人生やこの世界について深く考えさせてくれる小説群は、古今の小説史上、あまり見当たりません。ドストエフスキーは様々なテーマを個性的な登場人物の性格やそのストーリーに上手く含ませていくわけですが、人間や人生やこの世界の深淵を不意にかいま見せるような、登場人物たちの何気ない会話の設定も、これまた、すばらしいものがあります。

ドストエフスキーの小説は、「文学」というものの面白さ・感動・力・可能性を、私に大いに教えてくれる端緒になり、また、容易ならざる思想性・問題性を孕んでいるドストエフスキーの主要小説は、私を惹きつけ、文学を享受し文学の価値を考えていくことがその後の自分の趣味・課題の一つになってしまったのでした。

第103回 全国図書館大会に参加して

図書係長 若林 薫

第103回全国図書館大会が平成29年10月12日(木)～13(金)に東京都の国立オリンピック記念青少年総合センター(カルチャー棟大ホール)で開催され、私が出席しました。

12日(木)午後からの全体会では、開会式、第33回日本図書館協会建築賞表彰式、日本図書館協会理事長の森茜氏の基調報告、そして寺島実郎氏(一般社団法人日本総合研究所会長)の記念講演がそれぞれ行われました。

寺島氏の講演で印象に残ったのは、今後の日本は、たとえば「多摩ニュータウン」のように高度成長期に労働者の居住区として人口を増やしてきた他に産業や観光等もない地区は、人口の4割が65歳以上(有権者人口の5割=投票人口の6割を占める?)のコミュニティになってしまっているという内容でした。そしてその65歳以上による政治が行われる可能性を指摘していた点でした。

さらに、家計消費構造の変化により、自由に使えるお金が減少するこの時に、まさに図書館を利用する意義がある、というようなお話でした。



演題:「世界の中の日本,日本の中の図書館」

平成29年10月12日
全国図書館大会第1日目
「寺島実郎氏」による
記念講演会の模様

2日目の13日(金)は、会場をセンター棟に移して分科会が行われました。分科会は第1～第24まであり、午前中は第4分科会の「短大・高専図書館」の「短大・高専図書館へ向けての図書館多読への招待」に参加しました。

最初に酒井邦秀氏(NPO法人多言語多読理事長)から、『図書館における英語多読の実践』についての基調報告がありました。酒井氏は、冒頭で「皆さんは、中学3年間で5000語の英文しか学んでいないうえに、学ぶ「量」も「質」も悪い授業の内容となっている。さらに訳についても「実際の生活するうえでは正確なものではない」と説明がありました。そこで生活するうえで、使える英語を身に付けるには、絵本(英語多読書)から始め、ゆるやかな坂をゆっくり上るように進んでいく必要がある。さらに、分からない単語が出てきても「辞書は

捨てる(使わない)」、分からない英文は「見なかったことにする」、「読んで難しい本は捨てる」、このような姿勢で英語多読書を読んでいくことが必要であると力説していました。参加者とやりとりしながらの大変わかりやすい講演でした。

引き続き、西澤一氏(豊田工業高等専門学校教授)から、「高専図書館における多読支援の実践例」についての実践報告がありました。

豊田高専では2002年度から多読を導入した経緯とその成果についての実践報告がありました。多読を導入するきっかけになったのは、学生がTOEIC 550点をとれることを目標に電気・電子システム工学科で導入したのが最初であったとのことでした。次の段階は、授業を図書館で行いそのまま多読書を利用して学習するスタイル(読書記録をつける習慣)を定着させたこと、そして図書館としては段階に応じて、絵本、外国人向けの図書などを導入して専用のコーナーを設置して、本を探しやすいようにアルファベット順に配置したことだったそうです。その際、人気シリーズは複本を用意したことなどもあり、一般貸出に占める多読書の貸出冊数はかなり占めるようになったとのことでした。

最後に多読書の利用を前提とする「地域連携」を推し進めるため、「公開講座」、「多読授業の公開」、「多読クラブ月例会」等の開催を行った結果、一般市民の多読の貸出冊数(7,500冊程度(H28))と学生の貸出冊数(多読書以外)がほぼ同数とのことでした。特に印象に残ったのは、一般市民の方が図書館で英語多読の活動をするることにより、学生への良い刺激になっているとのことでした。

午後からは、第14分科会の「資料保存2」に参加しました。「資料保存1」は午前中にありましたので参加できませんでした。参加しました「資料保存2」では、特別報告として廣田桂氏(熊本大学教育研究支援部図書館課)から『平成28年熊本地震における熊本大学附属図書館の対応について』がありました。熊本地震が発生した直後から地震後の図書館内の被災状況、利用者への対応、地震後の復旧作業、被災前と被災後の危機管理のあり方等について、写真等で示しながらの生々しい報告を聞くことができました。

引き続き、中沢孝之氏(日本図書館協会図書館災害対策委員会委員、草津町立温泉図書館)から、『「人」を守る—そのとき、あなたは—』という演題での講演が行われました。突然災害が発生した時の図書館職員に求められるものについて、またそのような場合の図書館職員のあり方について、ワークショップ形式での実践的な講演でした。

平成29年度 学生図書委員名簿

学科 / 学年	任期	機械工学科	電気電子工学科	情報工学科	都市・環境工学科
1	1年	小畑 圭史	原 秋空	小野 稜太	日名子 梓
	前期	下鳥 健	片山 桂吾	森山 神	○阿南 雄大
	後期	下鳥 健	足立 裕哉	吉良 茉南花	阿南 雄大
2	1年	宮岡 雅弥	渡邊 剛	首藤 瑞希	織田 和希
	前期	佐藤 翔一	中尾 瑞生	緒方 聖七	片山 愛理
	後期	国宗 理恵	中尾 瑞生	緒方 聖七	伊達 大我
3	1年	池田 圭佑	小畑 鷹	岡本 美柚	亀井 菜央
	前期	上村 悠貴	深澤 稜人	濱田 裕太	若菜 遼甫
	後期	上村 悠貴	山田 海登	濱田 裕太	若菜 遼甫
4	1年	首藤 聖人	○吉野 佑弥	河野 実裕	小島 広行
	前期	岩下 建	姫嶋 真輝	多賀 舜哉	光野 正大
	後期	岩下 建	姫嶋 真輝	多賀 舜哉	清藤 優希
5	1年	◎高橋 雄文	小幡 昭平	○長野 耕平	碓井 アテナ
	前期	友成 巧	渡辺 宥飛	廣田 憲幹	司城 はんな
	後期	友成 巧	津村 誠也	廣田 憲幹	司城 はんな

*図書委員は上段が1年任期 ◎学生図書委員長 ○学生図書副委員長

平成29年度 読書感想文コンクール入選者

	クラス	氏名	題名	著者名
第1位	4S	工藤 琴乃	『 蠅 』 を 読 ん で	横 光 利 一
第2位	2S	岸本 うらら	『君の臍臓をたべたい』を 読 ん で	住 野 よ る
第3位	2M	南 圭 亮	『 虚ろな十字架 』 を 読 ん で	東 野 圭 吾
佳作	1E	上村 知也	十人十色の可能性-『色弱が世界を変える カラーユニバーサルデザイン最前線』 を 読 ん で	伊 賀 公 一
//	1S	廣瀬 花菜子	『 高瀬舟 』 を 読 ん で	森 鷗 外
//	1C	佐藤 快成	『 坊っちゃん 』 を 読 ん で	夏 目 漱 石
//	1C	庄司 早理衣	そうじで見方を変える-『ディズニー そうじの神様が教えてくれたこと』を 読 ん で	鎌 田 洋
//	3M	川野 健志朗	『 ツナグ 』 を 読 ん で	辻 村 深 月
//	3C	税所 茉奈	『 星の王子さま 』 を 読 ん で	サン=テグジュペリ(著) 河野 万里子(訳)
//	3C	若菜 遼甫	『 エースナンバー 雲は湧き、光あふれて 』 を 読 ん で	須 賀 し の ぶ

平成29年度 貸出上位者・貸出上位クラス

貸出上位者

順位	クラス	氏名	貸出冊数
第1位	2C	片山 愛理	314冊
第2位	4E	吉野 佑弥	181冊
第3位	2C	松尾 愛結	162冊
第4位	2C	椋本 美里	142冊
第5位	4E	池川 悠汰	107冊
第6位	4M	船越 啓樹	105冊
第7位	2M	国宗 理恵	94冊
第8位	4C	小島 広行	92冊
第9位	1M	下鳥 健	85冊
第10位	5E	中尾 優太	77冊

貸出上位クラス

順位	クラス	貸出冊数
第1位	2C	840冊
第2位	4E	324冊
第3位	5E	295冊



編 集 後 記

表紙の写真は、ダブリンにあるトリニティ・カレッジ図書館で、トリニティ・カレッジはアイルランド最古の大学で創立者はイングリッド女王エリザベス一世ということです。今回、その由緒ある図書館の「ロング・ルーム」の美しい写真を、写真家のThibaud Poirier氏のご厚意により、図書館報の表紙に掲載させて頂くことができました。

Poirier氏のホームページをここに紹介させていただきます：<http://www.thibaudpoirier.com/>

原稿をご執筆頂いた方々には、この場をお借りしましてあらためてお申し上げます。

また、高橋委員長をはじめ、1年間図書委員の仕事をしてくれた皆さんにも…ありがとうございます！

(図書館長補佐 東木 雅彦)